

### 第3章 宇部(小串構内)医学部体育館新営に伴う発掘調査

#### 1 調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟とは北西—南東に走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置し、昭和58年度に試掘調査を行なった体育館新営予定地内に包括される。前回の調査では新営予定地約1,100㎡のうち、既設の課外活動棟のある東半部を回避して約

260㎡について4ヶ所のトレンチ<sup>1)</sup>による調査を実施した。その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、旧石器時代後期のナイフ形石器、削器、古墳時代の須恵器および室町時代の土師器、瓦質土器等多様な遺物が出土し、周辺地域における今後の調査の必要性が喚起されるに至った。

しかるに、体育館新営工事の進捗と呼応して、今年度に入り新営予定地内にある課外活動棟が解体・撤去されることになり、未調査であった当該地域において発掘調査を実施した。調査は昭和58年度の試掘調査結果をふまえ、東西に5m×13mのトレンチを設定して撤去部分約215㎡のうち65㎡を対象とし、昭和59年5月1日から17日にかけて行なった。

なお、腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

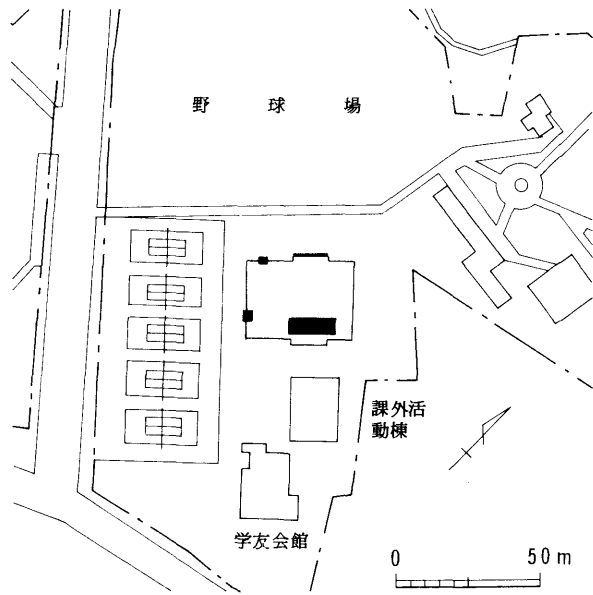


Fig. 6 調査区位置図

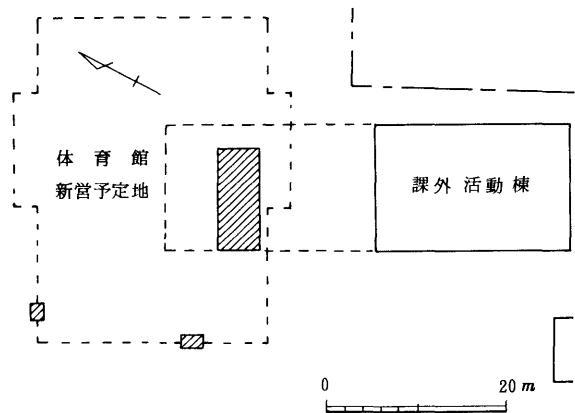


Fig. 7 調査区設定図

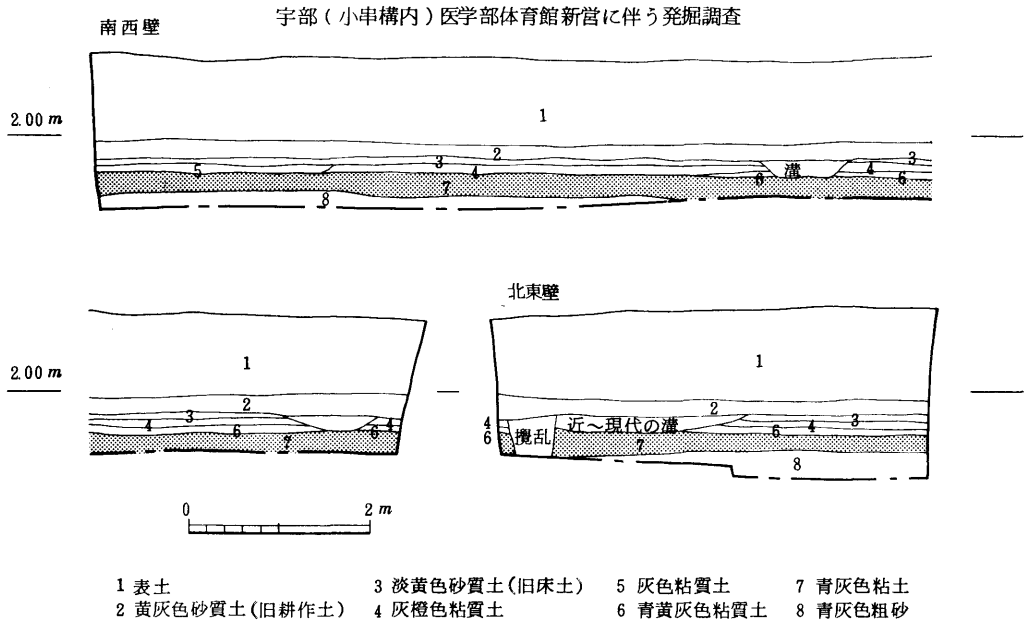


Fig. 8 土層断面図

また、調査区周辺地域では調査時における湧水および安全上の観点から地山までの掘削は行なわれていない。したがって、本調査期間中に新営工事と併行して、新営体育館の西部と南部の基礎部分2ヶ所を選定し、ハンド・オーガーによるボーリング調査を試みた。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

## 2 層位

現地表は平坦に近く、標高は約2.80～2.90 mである。調査区内において観察した堆積層は8層に分層される。第1層は厚さ約90～105 cmの腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土。第2層は旧耕作土。第3層は旧床土で下面標高は約1.70 mである。第4層：灰橙色粘質土以下が非人為的な二次堆積層で第4～6層は遺物を包含していない。第7層は約20 cm以上の厚さをもつ青灰色粘土層で土師器、瓦質土器が出土した。先にあげた昭和58年度の調査および第2章で述べた浄化槽新営に伴う発掘調査においても遺物を包含する同層の堆積が確認されている。第8層はトレンチ北半部を中心に部分的に堆積が認められる植物遺体を含む青灰色砂層である。なお、昭和58年度の調査で認められた南東－北西にかけて平行して走る近代から現代にかけての2条の溝の延長部分が検出された。

## 遺物

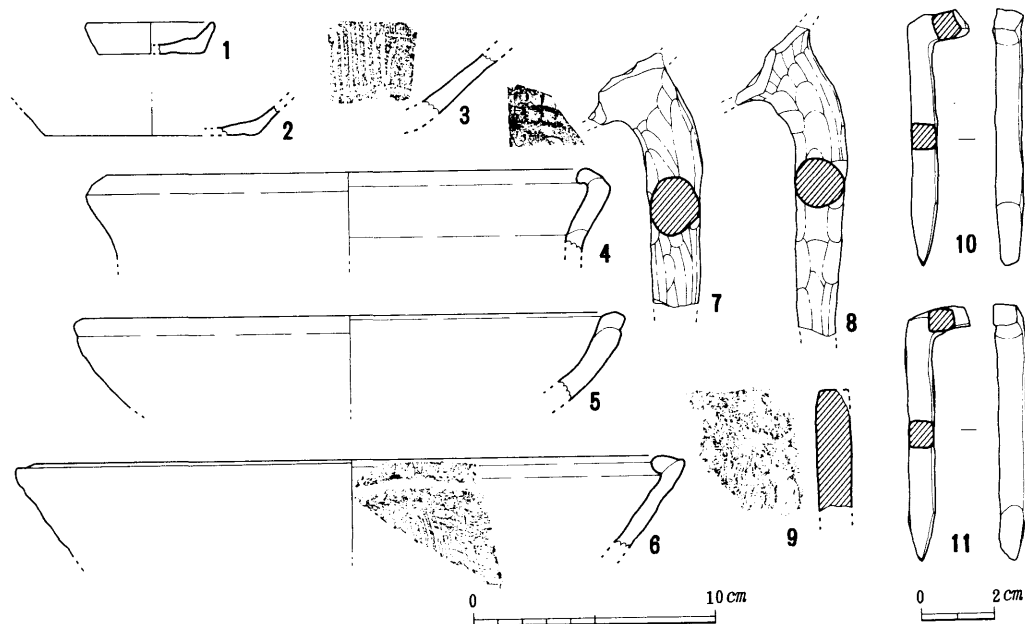


Fig. 9 出土遺物実測図(第2層9~11, 第3層2・7, 第7層1・3~6・8)

また、ハンド・オーガーによるボーリング調査では2地点ともに探査機械限界の現地表下約5.6 mにおいても地山は検出されず、第8層以下は精粗の差はあるものの青灰色砂層の堆積が観察されたにとどまった。

### 3 遺物

土師器(Fig. 9, 1・2) 1は小皿で底部周縁をわずかにつまみ上げる。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。復原口径5.1 cm、器高1.3 cm、底径4.4 cm。第7層出土。2は坏の底部で器壁は薄い。体部外面横ナデ、内面磨滅のため調整不明。第3層出土。1・2とも糸切り底。1は胎土不良、焼成良好。2は胎土、焼成とも良好。いずれも橙色を呈する。

瓦質土器(Fig. 9, 3~8) 3・6は插鉢。3は体部の下半部。6は口縁部内面が粘土帯貼付により内側に突出する。いずれも内面に少なくとも8条単位の櫛目描き上げが施され、調整は内外面とも横ナデ仕上げ。3は胎土、焼成とも普通で黒色を呈する。6は胎土、焼成ともやや不良で暗灰色を呈する。4は体部上半で外方へ開く鍋の口縁部で、端部は内側へ垂れ下がりぎみに屈曲する。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土やや不良、焼成良好で灰色

を呈する。5は鉢で口縁端部は丸い。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土、焼成良好で暗灰色をなす。7・8は鼎の脚部で裾部を欠損する。いずれも指圧による整形で、7は体部外面に格子目叩きを施す。7は胎土やや不良、焼成良好で黒色を呈する。8は胎土、焼成良好で赤黒色をなす。3～6・8は第7層出土、7は第3層出土。

瓦（Fig.9,9）薄手の平瓦。凹面の布目は斜め方向で凸面はナデ調整。胎土には多くの砂粒を含む。焼成は軟質で暗灰色を呈する。第2層出土。

鉄製品（Fig.9,10・11）頸部を直角に近く折り曲げた釘で、上面は上方からの敲打によりくぼむ。10・11とも全長70mm、厚さは10が6.5mm、11が8.0mm。第2層出土。

#### 4 小 結

医学部・医療技術短期大学の所在する小串地区では、昭和58年度以降調査が進められている。とりわけ、今回調査を実施した体育館周辺では施設整備等と呼応して、大学キャンパス内でも先進的に資料が蓄積されつつある地域のひとつである。

今回の調査では遺構は検出されなかったが、周辺地域に普遍的に堆積する青灰色粘土層より鎌倉時代後半から室町時代にかけての土師器、瓦質土器等が出土した。昭和58年度調査の際出土した旧石器時代の遺物は大部分が後世の客土中からの出土であるが、土器類は今回の調査区内でいう第6・7層にあたる非人為的な二次堆積層を中心に包含されている。また、浄化槽新営に伴う調査においても遺物は旧床土下2～3層の無遺物層を介した第10・15層からの出土である。したがって、キャンパス東端部の体育館周辺地域で遺物を包含するのは、ほぼ限定された二次堆積層であることが指摘できよう。

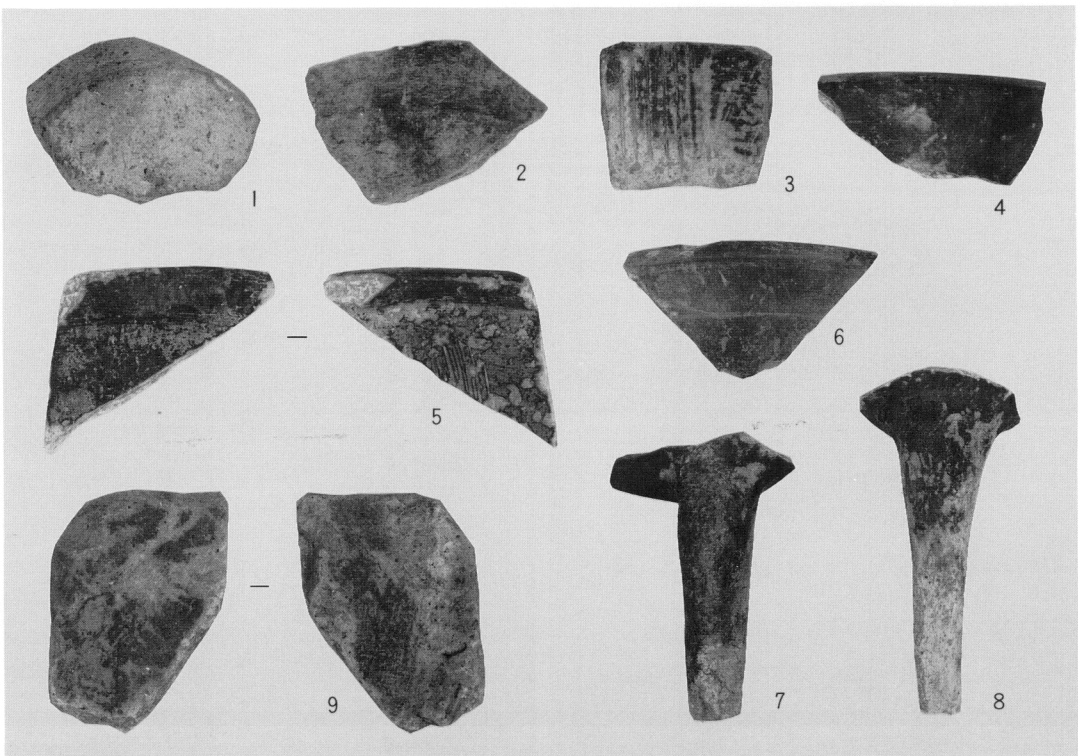
その搬入経路は現段階では一部未確認の遺跡も所在すると思われるが、川津遺跡および西ノ宮遺跡等の近隣諸遺跡から真締川に起因する搬入作用によってもたらされたものと想定される。しかし、昭和58年度調査に代表されるように、表土直下の旧耕作土および床土にも多様な遺物を包含することから、キャンパスに近接し体育館北方に所在する低丘陵周辺地域にこの時期の遺跡が存在する可能性は十分に考えられ、野球場および職員宿舎等の所在するキャンパス北東端部における今後の調査が重要な鍵を握っているものと思われる。

（河 村）



宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う発掘調査

(1) 調査区全景（北東から）



(2) 出土遺物